

解題と翻刻

中庄新川家蔵 古今和歌集聞書（仮題） 二

小高道子
山村規子

*キーワード

古今伝受・堺伝受・聞書・中庄新川家・新川盛政

【解題】

本書は、中庄新川家に所蔵される『古今和歌集』の聞書を記した折紙四紙で、『国文学研究資料館調査報告』三九号発刊後の調査で新たに見出された。整理番号は六一四五。所蔵者整理名は『俳句集』で「綴はずれ」と注記がある^①。用紙は楮紙。寸法は四紙ともに二五・五糎×三四・五糎。外題・内題など内容を示す記述はない。折紙にして記入し、右端上部に細字で「三」から「六」の漢数字を付す。中庄新川家には同様の折紙二紙が伝わる（以下、「聞書一」と略す^②）。同じ寸法の用紙に同様の形式で記されていて、しかも折紙に付された漢数字と、注釈を付された和歌とがそれぞれ「聞書一」に連続していることから、本書は「聞書一」に続く聞書と推定できる。「聞書一」は、第二紙の最後に空白があったが、本書は第四紙（「六」）の後に空白が見られる。あるいは、それぞれの講

釈がそこで一旦終了したのであろうか。また本書は『古今和歌集』春上の巻軸歌である第六十八首で終わっている^③。

講釈内容は「聞書一」と同様に、これまで知られている宗祇を継承する古今伝受の聞書とは大きく異なっている^④。また、これまでの『古今和歌集』聞書には見られなかった「羅山」の名が注釈部分に見られる^⑤。「ももちどり」「よぶこどり」という古今伝受の三鳥を含む和歌のうち二首を収めることも興味深い。

宗祇から肖柏に相伝された古今伝受は連歌師の間で広く伝えられたとされるが^⑥、その実態については知られていなかった。新川家には肖柏を経由する古今伝受の系図も伝わる^⑦。本書の発見により、これまで肖柏の門弟宗訊の聞書以外には知られていなかった堺伝受について、講釈の実態がより明らかになる。極めて貴重な資料であり、全文を翻刻すること

とした。聞書の内容については、稿を改めて検討を加えたい。

なお、本稿は中庄新川家文書研究会における共同研究の成果をもとに執筆したものである。中庄新川家文書の調査・研究については鶴崎裕雄・近藤孝敏両氏に負うところが大きい。また、新川家には貴重な資料の閲覧と公開に御許可・御高配を賜った。記して深謝申し上げる。

凡例

- 一 原文に忠実に翻刻するため、漢字仮名の別、濁点は、底本のままとした。
- 一 字体は通用の字体に改めた。ただし、一部の字体を残した所がある。
- 一 原則として、カタカナはひらがなに改めた。ただし、読みやすさを考慮して、注釈の部分で用いられたカタカナなど、一部カタカナを残した。また、私に読点を付した。
- 一 本書は整理された聞書を清書したというよりはむしろ、耳から聞いた内容を筆記したと推定されることから、見せ消し・補入などは、訂正後の本文に従った。ただし、訂正前の状態が確認できる所は、原本のままに再現した。また、文字を書かずに「――」や「……」で略してある部分はそのまま記した。
- 一 原本には「○」を付して注記した部分がある。「○」はそのまま翻

刻した。

- 一 原本の趣きを伝えるために改行はもとのままとし、行頭の位置は原本にならった。ただし、行間の異同は踏襲していない。
- 一 本書は、『古今和歌集』の聞書であるが、講釈の内容を中心に記され、詞書・和歌・作者などは省略されることが多い。そこで、新編国歌大観により『古今和歌集』の本文を各歌の冒頭に国歌大観番号とともにゴチックで示した。

一 判読不明箇所は□で示した。

〔注〕

- (1) 泉佐野市史編さん委員会監修「新川義清氏所蔵文書目録」。
- (2) 小高道子「解題と翻刻 中庄新川家蔵 古今和歌集聞書(仮題)」(『国文学研究資料館調査報告』第三七号、二〇一七年三月)。
- (3) 「聞書一」は春上部第七首目からはじまる。いわゆる「題号」すなわち『古今和歌集』という書名のこと、あるいは「春歌上」についての解説と第六首目までの和歌の解説が見られない。「聞書一」に記された漢数字の番号が「一」「二」であることとあわせて、冒頭部分の講釈がどのようになされたかについては疑問が残る。
- (4) 小高道子「堺伝受における『古今和歌集』講釈―中庄新川家蔵古今和歌集聞書(仮題)をめぐる―」(『中京大学文学会論叢』第三号、二〇一七年三月)。
- (5) 林羅山(道春)と新川盛政は駿河でおこなわれた和漢聯句で同座

している（鶴崎裕雄「新川盛政駿河下向記」の史料的研究——中庄新川家文書研究会 報告一——、『国文学研究資料館調査報告』三六、二〇一六年三月）。

（6）『顕伝明名録』は古今伝受を受けたとする連歌師の名を多くあげる。

（7）小高道子「中庄新川家蔵『伝受次第』と新川家の古今伝受」（『国文学研究資料館調査報告』第三八、二〇一八年三月）、近藤孝敏「中庄新川家蔵『伝受次第』」（『国文学研究資料館調査報告』第三九、二〇一九年三月）。

【翻刻】

三

題しらず

28ももちどりさへづる春は物」ことにあらたまれども我ぞふり行くも、ちとり

三鳥ノ伝、様々にいふ、鶯を云、古来也、定家

鶯に非とも、難一決、又限るへからず、

百鳥の——、柳桜を覗くへからず、

栄ぐわ物かたり

谷の鶯も

鶯とも別二聞ル、順徳院か説、——ノ下ニ

出され、エノミモリハム鳥卜御書也、

よみ人しらず

29をちこちのたつきもしらぬ山なかにおぼつかなくもよぶごどりかな

かしここ、と書て、おちこちとも云、遠近同し、

遠近のたつきも、便の心、タトキトモ古ハ云詞也、

何所へ取てヨキヤラン、

よふこ鳥、三鳥ノ一、

後拾

われ一人聞ものならハ——二声までハ

なかせしものを

又、我セこをなくさの山の——

水無月のなくセの山の——

今用る説ハ、春たちウラ、カニナルト、諸鳥の

声のおもしろく鳴を云し也、

万二、我宿の糸のミもりはむ百千鳥千鳥ハ

くれと君ハ来まさぬ

後拾遺に

鶯を離れて蛙の下ニ入候欤、ました也、

貫之

深山ニハ時も定めぬ百千鳥

後道下院ノ哥ニ、宗祇・宗長時分、

百——囀る中ニ新玉の年のはつ音ハ

鶯の声

詠めつ、人まつ待宵の——いつかたに

かは鳴わたるらん

秋も鳴也、

常に鳴鳥也、

羅山説、

源氏に、春鳴物と有、鳥をシルサヌ処也、

長谷川某、人を猿ともいふ、近來

秘して伝とす、以不知相伝の至極とすと有り、

鶴をぬへこ鳥とも詠けれハ、呼子鳥も

呼鳥ともいふ、

西行

山畑に 友鳴声のすこき

夕暮、鳩テ有ト云説、大かたあり、

閑子鳥、呼子鳥の声を以て云と聞ル、

季、春ノ三月比の事ニ、堀川院ノ時、定られたる、

御行の組様にて也、

かりのこゑをききてこしへまかりにける人を思ひてよめる

凡河内みつね

30 春くればかりかへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし

躬恒 撰者也、

祖父も不知、

甲斐の志、淡路守ニモ、御厨子所ノ預とも見ユ、

○春くれハ雁帰る也と連れし事、古来より

賞して慥ならねハならぬ也、

みち行ふりと云ハ、心ハ道行序テ也、ツレルト云事也、

衣ノ身ニ触と同じ、道行ついでに也、

玉

道行ふりと思ハさらなん、と有、

一本、しら雲とある、雁ノ道故、これよし、

雪と書て雪にふるに添へてとある、

定家の本あし、雪といふてふるとかけるハ、

後世のよミ口也、

帰雁をよめる

伊勢

31 はるがすみたつを見すててゆくかりは花なきさとにすみやならへる

伊勢

○春霞たつを見すし行かりハ花ナキ里に

此に桜といふ花あるを知らぬにやと也、

雁、常世の国よりと俗にいふ、花ハちるならひ

なるに、常世不変の国ゆへ、知らぬとおして

云説もあれとも、理屈なれハ不用ともよし、

桜ちる隣にいとふ春風ハ花なき里に

たつを、花なき里に、をハ持テニハ也、ハハ、ハクルテニハ也、

題しらず

よみ人しらず

32 折つれば袖こそほへ梅花有りとやここにうぐひすのなく

○折つれハ袖こそ匂ふ梅の花ありとや爰に

鶯のなく

梅を折ハ、袖こそ匂ふと聞候を、鶯もそふ

ありとや、なくこそ、ノ処ノ大事が聞える也、

爰ニハ野山ニ栖鳥、近く軒端に來鳴くを、爰と

いふ也、

後鳥羽院

月もなを名柄のはしにくちしはし有とや爰に □

すミわたるなん

右、橋柱の木にて文台をなされた哥也、

33 色よりもかこそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも

○色よりハ香こそあわれとおもほへす

くらへし時ハよりもの、もの字とりてハ聞えぬ也、

あわれハ阿怜アハレ、可憐レ也、

梅そも、そを入用、もハ添字、心なし、

天の原三笠の月かも、も、も添字也、そも、つも、かもと同じ手のも也、

夫よりも、これよりも、のも字にて、もを取たるあり、

上手の哥ならて不聞、一二首あり、

大納言きんとう

わかれより □ まさりておしき命哉君ニ二度

逢んと思へハフモ、今五輩のよむハからになる也、

34 やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人のかにあやまたれけり

○宿近く梅花うへじ、植まじ也、

あちきなくハ、無端センかたなき事ニテ、あちハ味也、

味ノ無キハ甘ニ対した事也、センかたなき事也、

宿近き

端ちか植じ、昔しを忍ふ恋となりけり、

35 梅花たちよるばかりありしより人のとがむるかにぞしみぬる

○梅花たちよるハかりありしよりから也

人のとかむるハ花の匂ひするゆへ、人よの人ニ

より添しかと、とかむる也、

四

むめの花ををりてよめる 東三条の左のおほいまうちぎみ

36 鶯の笠にぬふといふ梅花折りてかざさむおいかくるやと

三条の東の方ニありし也、

○鶯の笠に縫てふ梅の花折てかさ本件、ん老かくるやと

催馬楽、青柳を片糸によりて鶯の縫てふ笠ハ

梅の花笠

右を取ての故に、てふと云也、○鶯の枝をねて
く、り飛あるくを縫といふ也、或ハぬはれ伏と

いふ、西行哥ニあり、はらほふて居る事也、

糸す、きぬわれて鹿の伏野へにはころひ

そむる藤はかま哉

題しらず

素性法師

37よそにのみあはれとぞ見し梅花あかぬいろかは折りてなりけり

素性法師

○よそにのミ可憐の憐也あわれとぞ見し——色香ハ

むめの花ををりて人におくりける

ともりの

38君ならで誰にか見せむ梅花色をかもしる人ぞしる

ともりの

○君ならで誰にかミせん梅の花

此語弊

くらぶ山にてよめる

つらゆき

39梅花にはふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有りける

○梅の花匂ふ春へハくらぶ山

くらぶ山、清濁両説あり、不苦、先清よし、山城也、

所を不知、古来ニ依てミれハ、山城ニあるに違なし、

二説、くらぶ山いへとも、夫ハそれニて随事也、源の順

くらぶ山鹿野への女郎花

の案の事を以いへハ、嗟峨といふ詞あり、山城と思ふ、

へ春へハ春のかた也、

くらぶ山と云名の山を、闇にこゆれといちしるしと也、

月夜に梅花ををりてと人のいひければ、をるとてよめる みつね

40月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける

みつね

○月夜にハ夫とも見えず

闇ニハ物ノ隠れるもの、月夜ハものわかる、夫ても、

花の白故、わかりかたし、

はるのよ梅花をよめる

41春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えなやかやはかくるる

○春の夜の あやなしハ文也、衣服の文也、——なしハ

知かたく分かつたき也、

香やハかくる、ハ、かくす事ハならぬといふニ、やハとハ

打かへしにては也、

闇の、花をかくしても、香ハかくす事ならぬと也、

はつせにまうづるごとによどりける人の家にひさしくやどらで、
ほどへてのちにいたれりければ、かの家のあるじかくさだかにな
むやどりはあるといひいだして侍りければ、そこにたてりけるむ
めの花ををりてよめる

42人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかにほひける

詞書、かくさたかになん、やとりハ有とハ

○人ハいさ 主しの詞に、よふ門違へもせず来た、といふ也、

よふ道を忘れなんだ、と俗にいひし事也、

そこ、其所也、たてるとハ神代の巻也、樹の字ヲウユルとも、

タテルとも云、 所植也、

いさハ倒語の法、人の心ハいざ知らすと云也、不知を

万葉ニアリ、後世不知ハ、いさと清ミ、人をいさなふハ、

いざといふといへとも、同じ事也、

人の心もかるや、かハラぬやいなやをしらすと也、故郷ハ貫之

の生れし所ニあらず、住なれたる所をいふ、

其前書ノやとりなれたる家をさす也、

其主のかへしニ

花たにも同じ昔に咲ものを植たる人の考だに

心しらなん

水のほとりに梅花さけりけるをよめる

伊勢

43春ことにながるる河を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ

○春ことに流、川を花と見て

今までに春ことに川水に花の陰のうつるを

花とミて、水ニ臨んで折んとすれハ陰也、

ぬれなん、なんハぬれましといふても聞へる、あまり

違ふ事なき也、願のなん有、てにはのなん、

推量のなん、

やかすとも草ハもへなん、スイリヤツまかせたらなん、まかせてあれかし、

是願也、心のなきなん有、是てにはのなん也、

44年をへて花のかがみとなる水はちりかかるといふらむ

○年をへて

ちりかゝるハ、鏡に塵のかゝるにうけて聞カス也、

家にありける梅花のちりけるをよめる

つらゆき

45くるとあくどめかれぬものを梅花いつの人まにうつろひぬらむ

○くるとあくどめかれぬ 日の暮 夜明 目をハナサズミテイル也

いつの人まにとハ、人のミンまに、うつろひハ散斗

ならず、いろなとかわる事也、散もうつろふ也、

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらず

46梅が香をそでにうつしてとどめてば春はずともかたみならまし

○梅かゝを袖に

と、めてハの、ハの字、バとよむ心よし、と、めたらバ也、

春のかたミとなるてあろう也、

かたミならまし、べしと申し、へし重キ故

上二かけ合ぬ心にて也、

素性法師

47 ちると見てあるべきものを梅花うたてにほひのそでにとまれる

○散るミてあるへきものを梅花うたてて匂ひの

花の散たの哥也、うたてとハ、菅家別庸とも御書アリ、

よのつねと也、うたてハ、貫之、蟻通にて馬すくミし時、

うたて有神也ト云事也、怪異奇異と書て

ある、菅家も其心よの庸ならぬと云心ニあたる、

うたて、すんでよむ也、

題しらず

よみ人しらず

48 ちりぬともかをだにのこせ梅花こひしき時のおもひいでにせむ

○ちりぬとも香をたにとハ、香をなりとのこせと也、

思ひ出と云ハ、昔在しを後に思ひ出してなくさむ也、

たに、本字ハ拾遺にもあり、そふたにハ、そふなりと也、

散花の

人の家にうゑたりけるさくらの花さきはじめてたりけるを見てよめる

つらゆき

49 ことしより春しりそむるさくら花ちるといふ事はならはざらなむ

○ことしより春しりそむる

此卷ニハ桜の咲を云、次の卷ハちるを云、

只花と斗有ハ、何の花ても花とも、桜に

かきらす、後世ハ花ハ桜になる也、花と云題に

桜く^なし^しか^らす、桜と云と花とハ詠^ムます、

人の家植置し桜、今年はしめて咲たる也、

ちるといふ事ハならはずしてあれと云也、

ちるハあたなるもの故、かく云人の家の

哥なれば、祝する心也、

春しりそめハ、貫之はしめて云出ス也、

題しらず

よみ人しらず

50 山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさむ

○山たかミ

すさめぬハ興じぬ事也、山高くといわず、

た^マミとゆるめしてには也、

はやすとハ栄の字にて、もてはやす心也、

すさめ、我心の行事をすさめ也、慰め也、手すさめ申し、

惠慶法師

生れとも駒もすさめぬあやめ艸

かりにも人の来ぬハ侘しき

又ハ異説を書たる也、

又は、さととほみ人もすさめぬ山ざくら

51 やまざくらわが見にくれば春霞峰にもをにもたちかくしつ

○山桜わか身にくれバ春霞

尾とハ山ノ末ノ処也、獸ノ尾の心ト同し、尾上ト

いへハ嶺ニなる也、

戦国策ニ、常山の尾、尾を末とよませあり、

そめどののきさきのおまへに花がめにさくらの花をささせ給へる

を見てよめる

さきのおほきおほいまうちぎみ

52 年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし

そめの、后とハ、秋子と云、忠仁公ノ文徳天王の后、

ヲ、キ町の北、そめとのといふ殿也、

さきのおほき忠仁公なり、

撰政太・・・・の事也、

年ふれハ

しかハとハ、そうハと也、花をミレバとハ、娘后君ニ書テ参、

そふハあれど也、

なぎさの院にてさくらを見てよめる

在原業平朝臣

53 世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

「清よし、濁説悪し、

○世の中にたへて

五

桜咲ぬ時ハ、とふそあた、かになれと思ひ、

咲てハ風雨を氣遣ひ、心遣有故ニ、花か

なけれハ心ものとけかろう也、

春の心、業平の哥より始り、人々よむ、

題しらず

よみ人しらず

54 いしばしるたきなくもがな桜花たをりてもこむ見ぬひとのため

○いしはしる瀧なくもかな

石走るとも書テ有、

いわハしる、万葉ニ石走とも書である也、

瀧の上のゑたミあけた上を瀧のはしる也、

瀧ハ沸と云テ、タギと云である、タギル心也、

いわはしる瀧なき花の甲斐ぞなき

山端へのほらんとすれハ、皆こほれけり、

山のさくらを見てよめる

そせい法し

55 見てのみや人にかたらむさくら花てごにをりていへづとにせむ

○見てのミヤ

のミヤ、ばかり也、ヤハと云心を、やと上手
ゆへよミし也、いへつとハ肴を苞をつとト云、
旅からハ旅つと、都からハ家つと、浜つと、
山つと、もいふ、

花ざかりに京をみやりてよめる

56 みわたせば柳桜をこきませて宮こそ春の錦なりける

○見わたせハ

此詞、上の五文字ニ至れとも云、決而そふいふニも
あらず、置様ニよる也、はるかにミる所ニ
遣ふ也、こきまぜハかきまぜる心也、
錦を織まぜた様々ミゆる故、春の錦也、

さくらの花のもとにて年のおいぬることをなげきてよめる

きのものり

57 いろもかもおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

○色も香も同じ昔にさくらめど

詞書ニある故、哥花なし、都而詞書の

哥ハ詞書にゆつりて詠む故、さつはりする也、

さくらめト云ニ、桜の事を入れて云ト説

あれど、是詞書ニて済、咲々ぬと云し也、

あらたまりとハ、爰ニてハ古行事コウジニなる也、

百千鳥の新たまりとハ、表裏也、花ハ昔の
通ニて、我ハ年へてあらたまるハ旧り行也、

をれるさくらをよめる

つらゆき

58 たれしかもとめてをりつる春霞たちかくすらむ山のさくらを

○たれしかもとめて

とめるとハ、尋るト云字、万ニアリ、たれしかも、
たれか也、人より花を折たるをミせしを
よめる哥也、

花ミよと尋て折る山花ヤマハナ旧にし

色と誰かミるらん

歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる

59 桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雪

○桜花さきにけらしイなあしイひイきのイ山イのかひイよりイ見ゆるイ白雪イ

けらしも、咲にけるらしもと也、るを除て云也、
俊成も、此哥を賞しられたる也、

山のかひハ山のあひ也、山と山との間也、

けふか明日か決也とまつ

我世をハ涙ナミダのかひのとよまれし也、

なまけふかあすかとまつたのあひかひのの也、涙の枕といつれニ事カけん、

イ^{けらし}かて、決定少なし、

なれハ、決定、嗟嘆咲のてには也、

同しハ字、山のかひたな引わたる白雲ハ、遠キ桜の

ミゆる也けり、同し哥にて、古今の哥

すくれてよきハ、てにはよき也、

足引の山田を作り、と有て皆如此、

足の疾とも書て、足いたニて足を引て

山をのほると云説、古来の説、是あまり

幼なき説也、今一説あり、是ハ生ふる

茂キの山也、生るのおと、足引のあと、五音

通る也、アタゴ○ヲタギ、皆筋違ニ通るニ同し、

シビキハシケキキ也、山ハ木の木のシゲキを

あひする也、奈良の末ハ足曳の、と云て

山ニして仕廻である、あかなしニ足曳と

いへハ山の枕詞也、

△哥ニ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

60三吉野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける

○みよしの、

古の桜、直によむ哥、古風候へ、嫌ども

是ならでハ、哥とハいはぬ也、

とものり

後撰

△みよしの、よの、山の桜花しら雪とのミ

あやまたれぬカ見えまかへつ、

やよひにうるふ月ありける年よみける

61さくら花春くははれる年だにも人の心にあかれやはせぬ

○桜花春くハ、れる

三月二なると、暮春盛ニて、草も弥生茂るゆへ、

いや生といふニて弥生也、此哥、次の巻へ不入爰へ出るハ、

春くハ、れるとハ、

此呼かけハ、貫之の桜花とハ違、是ハ桜を有情にして

さくら花と呼かけて、汝さくら花といふ也、

あかれやハするとハ、あかれやハせぬといふ

人の心ニあかれるか、あかれやハせぬ也、

さくらの花のさかりに、ひさしくとはざりける人のきたりける時

によみける

62あだなりとなにこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

○あた也と名こそたてれ

いせ物語ニも有、様々、此作者、女とミゆる也、

あた、万葉ニ異情と、あたし心と也、あハ発語、たハ

他人の他、他へ心をうつす也、只外の事也、

よみ人しらず

伊勢

君を置いて外心をもたば也、花のはかなく
散る、あたといふ也、

あた也とハ、早く散る桜に名がある也、

人もまちけり、爰でハまち得たる事也、まち

て居るもまちけり、爰ハまち得たる也、花に

よそへて我心のかわらぬ事を云也、

返し

なりひらの朝臣

63 けふこずはあすは雪とぞふりなましきえずはありとも花とみましや

返し

○けふこすバ雪とぞ降なまし

見ましやハ、やハのヤ也、のちに來れハ、昔の心ニあらで、

心ハかわり果てしまふであらう也、

題しらず

よみ人しらず

64 ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらをらばをりてめ

○ちりぬれハ

しるしハ、垂仁記ニ何ノ益と書て、しるしと

よんで有也、折てめハ、折たらめ也、

65 をりとらばをしげにもあるか桜花いざやどかりてちるまでは見む

○おりとらハ

おらハおりてめと上の哥ニある故、爰ハ折てハ也、
いさ宿を桜の本にかりてミ暮そふと也、

六

きのありとも

66 さくらいろに衣はふかくそめてきむ花のちりなむのちのかたみに

有友卿、友則の父との説もアリ

○桜色に

是ハ古來ハ其色ニ染る也、白に少しあかき

をさしたる色也、

ちりなんハ、ちらんと云ヲ延テいふた也、

さくらの花のさきけるを見にまうできたりける人によみておくり
ける
みつね

67 わがやどの花見がてらにくる人はちりなむのちぞこひしかるべき

○我宿の花ミかてら

花ミ兼なからと也、見廻にくる人ハ、花散たら

來まひと本無意ニあらうと也、

亭子院歌合の時よめる

伊勢

68 見る人もなき山ざとのさくら花ほかのちりなむのちぞさかまし

亭子院 天子の御殿也、

仙洞の外ノ宮也、
落陽城方一里離宮也、

ミる人も

さかましとハ、のちにさげと云心也、外の
花を見散してから来るぞといふ也、

後にさくべしと云心也、爰てハ、さく

へき事そと教る心也、

外、古来なし、誤るならん、定家の

本と今例ニテアル、

ことわりなれハ、外といふ字也、

うつせミの世の

よそニミし山をや

今ハよるハかりと思わん、

皆、古来ハ外といふ字をよそと申せし也、

後く誤て也、

光なき谷にハ春もおそ桜ヨッ外の

ちりなん後やさかまし

工二、なたらかに、面白し、

」

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or letter, written on aged paper. The text is arranged in several columns, with some lines starting with decorative flourishes. A ruler is visible at the bottom of the page, indicating the scale of the document.

○後名
○後名
○後名

○後名
○後名
○後名

○後名
○後名
○後名

○後名
○後名
○後名

○後名
○後名
○後名

○後名
○後名
○後名

○後名
○後名
○後名

○後名
○後名
○後名

○後名
○後名
○後名

○後名
○後名
○後名

